

博士論文要旨

韓国における農村居住アジア出身結婚移住女性の日常世界

—女性たちの日常的「実践」に注目して—

言語社会研究科

学籍番号：LD091008

氏名：具美善

本論文は、韓国の農村地域で暮らすアジア出身結婚移住女性たちの日常世界をエスノグラフィーの手法を取り入れて考察したものである。特に注目したのは次の二点である。

一点目は、韓国社会がどのように結婚移住女性たちを「他者化」「定型化」しながら彼女たちに同化や再生産労働の圧力をかけているのか、ということである。二点目は、こうした韓国社会の要求や圧力に当事者である結婚移住女性たちがいかに対応しているのか、ということである。これらの二点に注目した理由は、第一に、既存の研究では結婚移住女性たちが同化や再生産労働の圧力を受けていることは明らかにされているものの、日々繰り返される彼女たちの生活の中で、具体的に誰が、どこで、いかに彼女たちにプレッシャーを与えているかという具体的な場や状況が見えてこなかったからである。第二に、メディアを通じてみた結婚移住女性のイメージと、調査地で出会った結婚移住女性たちの実際の姿に大きいギャップがあったからである。メディアで見る結婚移住女性は主に無力で被害者的な姿であったが、筆者が2008年初めて調査地を訪れ、多くの結婚移住女性たちに出会って感じたのは彼女たちの「力強い生命力」であった。もちろん、彼女たちは韓国社会において弱い立場に置かれている。だが、彼女たちには自らの脆弱な立場を組み立て直す力があると思われたのである。こうした背景で、筆者は上に挙げた二つの研究課題を明らかにするため、文献調査とともに2008年から2014年にかけて忠清南道・論山市でフィールドワーク調査を行った。そこで、多くのアジア出身結婚移住女性たちと出会い、話し合い、彼女たちの日常世界を観察した。また、「論山市多文化家族支援センター」で韓国語を教えながら、韓国政府の主導下で行われる結婚移住女性に対する再社会化教育について考察した。そして、その結果を序章から5章そして終章の順でまとめた。

第一章では、本研究の理論的背景について検討した。まず、世界的に「移民の女性化」が進み、「再生産労働の国際分業」と呼ばれる現象が起きた背景に触れた上で、その一例として韓国における結婚移住女性を取り上げた。そして、韓国社会で結婚移住女性がステレオタイプ

イプで語られていることや周縁的に位置づけられていることを明らかにし、社会的弱者のストラテジーについて理論的に検討した。

第二章では、韓国に居住する「外国人住民」を大きく①華僑、②外国人労働者、③結婚移民者、④留学生、⑤難民に分けて概観した上で、2009年の「多文化家族実態調査」のデータを示しながら「多文化家族」（国際結婚家族）の特性とその家族に関わる法律や政策について整理した。

第三章では、結婚移住女性及び韓国人男性が国際結婚を選択した背景と動機について考察した上で、家庭における結婚移住女性の日常世界を描いた。まず、韓国人夫と外国人妻の結婚動機について考察した結果、二人は正反対な結婚動機をもち国際結婚を選択していることが把握できた。結婚移住女性の場合は、出身国では希望が持てず、自分の人生をより良い方向に転換させたいという望みをもって国境を越えていた。つまり、彼女たちは冒険心豊かで進取的な「現代的な女性」なのである。一方で、韓国人男性は、学歴や経済力、家庭環境などの理由で韓国人女性との結婚を諦め、最後の策として国際結婚を選択しており、彼らが求める妻は、家族のために自分を犠牲にし、再生産労働を忠実にこなす「伝統的な女性」だったのである。すなわち、結婚移住女性たちは移住を通して「現代の先進国女性の生き方」を実現しようとした反面、韓国人男性は外国人女性を迎え入れることで「伝統的な家族」を維持しようとしていたのである。それは、結婚移住女性の家族形態だけを見ても明らかである。結婚移住女性たちは舅・姑と同居している比率が非常に高い。「2009年の多文化家族実態調査」によると、結婚移住女性の27.5%が舅や姑、または夫の兄弟と同居しており、邑・面地域（主に農漁村地域）に限ってみると41.3%まで上る。本研究においても27人のインフォーマント女性のうち70%を超える19人の女性が舅・姑と同居したことがあるか、現在同居している。これは韓国全体の拡大家族の比率が2005年時点で10.1%であることから考えると驚くべき数値である。結婚を通じて韓国の拡大家族に編入された結婚移住女性たちは当然ながら様々な困難に直面していた。言葉の問題や文化の違い、経済的な問題はさることながら、多くの女性たちは韓国の家父長的な家族文化に戸惑いを感じていた。ただでさえ家父長的な家族文化では夫が強い権力を持っているわけであるが、多文化家族の場合は一層その傾向が強い。なぜならば、マイノリティである妻はマジョリティである韓国人夫に依存せざるを得ないシステムになっているからである。実際、夫の協力がなければ結婚移住女性たちは在留期間の更新もできないし、就職も不可能である。こうして夫婦関係の主導権を握っている夫たちは、結婚にあたって抱いていた思惑通りに妻に対して「伝統的な女性としての役割」を求めているのである。もし、妻がそれに応じない場合、夫は妻の外出や電話を禁じたり、

在留期間の更新や帰化申請に協力してくれなかったり、経済的に圧力をかけたり、暴言や暴力を振ったりする形で妻を圧迫する。さらに、姑たちも外国人の嫁をあらゆる面で不安に思う傾向が強く、嫁に権限を与えようとしなかった。姑たちは外国人嫁を「教育やしつけが必要な子供」として捉え、嫁の行動を注視し、いちいち干渉していたのである。姑にとってこうした行動は姑としての当然の責務であり、息子家族を「守る」行為でもあるのだが、嫁にとってみればこうした姑の行為は「越権行為」にはほかならないのである。

第四章では、結婚移住女性の家庭以外の「居場所」として「多文化家族支援センター」を取り上げた。2013年現在全国に211カ所ある「多文化家族支援センター」は、結婚移住女性の居場所でもあり、結婚移住女性の再社会化教育が行われる場でもある。筆者の調査地である忠清南道・論山市に多文化家族支援センターができたのは2009年7月であるが、ここでは韓国語教育をはじめ、韓国文化や韓国生活適応教育などが行われている。特に、韓国語教育が盛んに行われているが、興味深いのは韓国語教育の際に用いられる韓国語教材である。これらの教材は韓国の国立国語院で結婚移住女性向けに開発され、発刊されたもので、全国の多文化家族支援センターで使われている。教材の特徴は、結婚移住女性の日常生活に関わる主題や語彙が多いことであるが、注目すべきことは教材には常に結婚移住女性が従順的な嫁・妻として、再生産労働の担い手として描写されていることである。また、イラストだけを見てもすぐ分かるように嫁姑の序列関係が明確に描かれており、性別役割分業意識も鮮明に表れている。つまり、結婚移住女性たちはこれらの教材で描かれている自分たちの姿を見ながら、それを通じて韓国語と韓国社会を学んでいるわけであり、これらの教材は、韓国語を教える道具にととまらず、韓国社会が結婚移住女性たちに期待する役割行動を彼女たちに内面化させるための媒体となっていると言える。こうした「隠れたカリキュラム」は、韓国語教育だけではなく韓国文化教育においても表れていた。韓国文化教育で常に強調されていたのは「韓国の伝統文化」だったのである。たとえば、韓国人女性には求めないコチジャン作りや茶道、伝統衣装、礼儀作法といった伝統文化を彼女たちに求めていたのである。すなわち、多文化家族支援センターは、韓国社会が結婚移住女性に期待する規範や役割を学ばせ、内面化させる空間としても機能していると言える。

第五章では、韓国社会において弱者である結婚移住女性たちが、期待される役割や社会的圧力に対応しながらも、自分の欲求や意図に合わせて、自らの脆弱な立場を組み立て直していく日常的「実践」について考察した。女性たちは基本的に韓国社会や韓国家族に認めてもらいたいという願望を持っている。そのため、できるだけ葛藤を避け、黙々と期待される再生産労働を実践していた。こうした行動が伝統的ジェンダー規範の再生産につながるもの

であるとしても、女性たちはこうした実践によってのみ構造上の周縁から中心へと自らを移すことができるので、あえてジェンダー規範に従事することで、交渉力を手に入れようとしていたのである。また、女性たちは韓国国籍を取得し、「韓国人」としての法的地位を手に入れることで韓国滞在の安定化を図っていた。しかし、彼女たちにとって国籍はそれほど大きな意味を持つものではなかった。彼女たちにとって国籍は必要に応じて変えられる「道具」であって、女性たちは自らを「韓国人」として帰属させなかった。彼女たちは自らを二つの国をまたがる存在として位置づけていたのである。一方で、女性たちは、韓国社会にただ「順応」及び「同化」するだけではなく、自分の意図に合わせて、積極的に交渉・抵抗しながら自らのポジションを確立していた。特に、女性たちは妊娠をきっかけにそれまで我慢していた出身国の文化や自分の感情を表に出していた。また、出産を通じて地位上昇を感じ取った後は徐々に「従順な嫁・妻」の姿をやめ、状況によっては「反撃」も行っていた。女性たちの反撃の手法は、偽りの服従や口答えなどのソフトなものもあれば、脅かしや家出などのハードなものもあるが、こうした日常的「実践」を通じて彼女たちはそれまでの家父長的な生活文化や序列関係、権力関係を徐々に揺るがしていくのである。さらに、女性たちは経済活動やボランティア活動、地域の行事に積極的に参加しながら、地域社会に自分たちの存在を可視化していた。女性たちはこうした活動を通じて「私たちは可哀そうな存在ではない」「いつも助けられるばかりではない」という側面をアピールしていたのである。つまり、彼女たちは自らの負のイメージをそのまま持ち込むことで、社会によってコントロールされるだけではなく、多様な実践を通じて自らの負のイメージを希釈あるいは攪乱しながら、地域社会の同等な市民としてのポジションを確立していくのである。

以上のように、韓国における結婚移住女性たちは弱い立場に置かれていることは間違いない。しかし、彼女たちは自分なりの様々な日常的「実践」を通して、自らの人生を切り拓こうとしていた。そして、こうした彼女たちの日常的「実践」は、韓国社会の構造やシステムを完全に変える可能性はないにしても、緩やかな形で韓国社会を変化させる可能性を秘めていると言えよう。